同窓会報
第124号
2016年６月１日発行
千葉大学教育学部
同　窓　会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

グローバル化を目指して

千葉大学教育学部同窓会副会長　小宮山　伴与志
（千葉大学教育学部副学部長　S56・3卒）

今年は桜の開花が遅れましたが、そのおかげで入学式の四月五日には、きれいに咲き誇る桜の中、新入生を迎えることができました。しかし、本年度は本学卒業生が在学中に中学生を誘拐・監禁した疑いで逮捕されるという、大変残念な事件の喧噪の中での出発となりました。教育学部は直接的関係が薄いとはいえ、千葉大学の威信が傷ついたことは事実であり、このことを胸に深く刻んで今後の学生指導に当たりたいと考えております。

さて、千葉大学は文部科学省からスーパーグローバル大学の選定を受け、“Rising Chiba University”という標語のもと、「卓越した教育研究大学」を目指して突き進んでおります。教育学部でもＴＷＩＮＣＬＥプログラムが大きな成果を上げています。このプログラムでは、ＡＳＥＡＮ諸国の学生を千葉大学に受け入れると同時に、千葉大学が誇る先端科学や技術を、中学・高校向けの英語授業として構築し、ＡＳＥＡＮ諸国の中学・高等学校で授業実践するものです。教育学部学生も多数参加し、指導技術、英会話能力、コミュニケーション能力、平易に伝える技術等の向上に効果が見られ、評価は上々です。また、昨年度は文部科学省ユネスコ活動費補助金を受け「人間力を育む千葉ＥＳＤの地域活動」も展開されました。このように、教育学部ではあまり見られなかった様々なグローバル化に即した活動が展開されております。今後これらの流れは、大学院や附属学校・園などにも波及し、グローバル化に対応した改革や取り組みが求められるかもしれません。財政難の中、学部の教員数が漸減し、授業以外の負担も増加する状況で、多くの教員が教育学部の目標達成のために真摯な活動を続けております。今後とも同窓会の温かい御支援を賜れれば幸いです。

自己理解・自己決定・自己実現を目指して

千葉大学教育学部附属中学校長
（千葉大学教育学部教授）　丸山　研一

千葉大学教育学部附属中学校の歴史を振り返ると、その発端は、昭和二十二年、千葉師範学校男子部及び女子部に、附属中学校が併設され、それぞれ千葉師範学校男子部附属中学校、同女子部附属中学校として発足したことにさかのぼる。その後、千葉大学の発足によって、千葉大学千葉師範学校第一附属中学校及び第二附属中学校と改称、さらに昭和二十六年には、千葉大学の改組に伴い、文部省令によって、校名を千葉大学教育学部附属第一中学校、同第二中学校と改称した。

当時、附属第一中学校は、現在の千葉市亥鼻の地に、また、第二中学校は四街道にあり、この両校は、昭和四十年に統合し、この弥生の地において、千葉大学教育学部附属中学校として、新たなスタートを切ることとなった。平成二十七年四月は統合からちょうど五十年目であり、統合前の卒業生を含め、多くの参加者を得て記念式典が開催された。

本校では、「自己理解、自己決定、自己実現」を教育目標に掲げ、生徒の自主的な活動を重んじる教育を実践している。制服も指定はなく、授業の開始を知らせる予鈴もないことは、本校の教育理念の表れである。この教育理念によって指導を受けた卒業生は多士済々で、各界で指導的な役割を担っている。実業界や教育、医療、法曹関係は言うに及ばず、芸術やマスコミの分野で活躍している卒業生も多い。本校の卒業後、再び本校で後輩の教育に携わっている教員や、千葉大学の教員として在職している卒業生も珍しくない。

統合から五十年、その間に社会の情勢は大きく変わり、今もなお変わり続けている。その中で、本校では情報をめぐる環境の変化を積極的に捉え、ＩＣＴを効果的に利用した特色ある授業を実践しており、マスコミ報道でも取り上げられたところである。また、授業ばかりでなく、様々な活動でも、多くの生徒が優秀な成績を収めるなど、本校はモデル校としての役割を果たし続けている。

生涯学習の継続

本田碩孝
（S44・3卒　鹿児島県・日置市）

いにしえの道を聞いても唱えても　わか行いにせずば甲斐なし

（①斉藤藤之幸著『西郷大久保稲盛和夫の源流島津いろは歌』出版文化社、平成十二年の書き出し）に、はじまるいろは歌は薩摩藩の家庭で、子弟教育のための貴重な家庭読本の一つであったとともに藩政時代には、藩文教の経典として尊重されてきたと伝えている（②『薩摩の郷中教育』鹿児島県立図書館昭和四十七年三十九頁）。歌は神儒仏三教（神道・儒教・仏教）の教えを基に人間の守るべき道を教えている（尚古集成館版芳即正解説）。①の斉藤氏が栃木県出身と知り解説を読み感激し全歌を覚えた。忘れぬ為毎日復唱し、現在に活かす努力をして生活している。自己反省の歌だと思っている。南九州市武田神社には一首ずつ石碑に刻まれて建立。いろは歌かるたがあり、かるた大会も開いている。②郷中（ごじゅう）教育関係図書資料は数冊発刊されている。

次は思いと実践。

一番目は同窓会員で全国的な記録を残すことはできないか。第百二十号に蛇の話を一部紹介した。蝮一つでも奄美諸島にはいないし、似たヒメハブがいる島といない島がある。呼び方でも全国で違う。鹿児島はマムシだが熊本県からヒラクチだ。蛙は卵を何月頃産むか。二〇一五年は十一月六日には産んでおり、十八日には孵化したのもいた。オタマジャクシはタビル。蛙はアッタンビッキャ。皆の所は？

二番目は、五十年ほど採録を続けた方言かたり、民話中心の民俗文化のまとめかたとして『徳之島の方言・民俗事典』（仮称）を編集中。千三百頁（B五版二段組）を越したので方言と民俗の二分冊にしている。琉球方言は本土方言と二分される言語文化だが、消滅の危機にある。私の言語形成期は方言だが、共通語の方が豊かになっており、ふるさとの原風景とともに失われつつある。

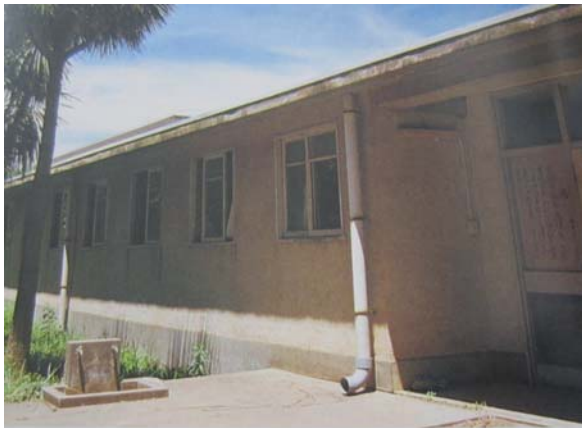
「わが胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙は薄し桜島山」（平野国臣）の心意気で過ごしたい。

我が学舎の今昔（一）

ピアノ教室

宮葉清子
（S50・3卒　千葉市　同窓会報編集委員）

小学校の教員免許を取得した同期の友人と話すと決まって話題となるのが、ピアノ練習室のこと。遠くて、暗くて寂しい、寒い、暑い、辛いという言葉が共通して出てくる。



S41年度からＨ４年度まで使用

コンクリートブロックの狭い部屋に一台のピアノが置かれて、長屋のように十室以上並んでいた。二十四時間開放され、いつでも練習できた。外の通路から、直接出入りするようになっていて、中からドアを開けると、いきなりグラウンドが見えた。

現在は、平成五年に建設された瀟洒な音楽棟一階にあり、施錠されていて、使用の許可が必要である。

Ｈ６年度から現在使用中

現役の学生から

平凡な、そして輝かしい日々

田久保　尚
（H25・4入　習志野市）

夢にまで見た大学生活は出会いと刺激の連続だった。

中学校英語科に所属。予備校で講師のアルバイトをし、サークル活動ではバレーボールとスキューバダイビングをしている。私はどこにでもいる普通の大学生だが、それでもその内容は驚く程に濃いものだった。

私の学科は一学年九人と少ない。そのため春には運動会を開催し、夏には全学年で旅行をするなど、とても深い関わりを持てるのが特徴だ。そんな仲間に囲まれて受ける日々の講義は楽しく、とても充実している。バレーボールサークルでは最高の仲間たちと出会い、心の底から幸せで、心地の良い日々を送っている。僕にとって彼らは一生の宝物といえる大切な存在だ。

そんな日常の他にも、毎年ちょっとした冒険をしてきた。

一年次では夏休みの一か月を利用して東南アジア五ヵ国をまわった。一か月という期間、異国という場は、多くのことを考えるにはうってつけだった。世界のこと、日本のこと、自分のこと、人生のことなど、思考はどこまでも広がり、少しだけ人間の幅が広がった気がした。

二年次ではツインクルプログラムに参加し、インドネシアで高校生を相手に理系の院生と協力して授業を行った。文化も言葉も年齢も違う相手と高いレベルで意思疎通をするため、メンバー全員で協力して一つの授業を作り上げた。

三年次ではいよいよ教育学部の一大イベントである教育実習を迎え、仲間たちと共に全力で取り組んだ。教員としての自分の原点ともいえるような、有意義な経験をすることができた。

自由すぎる大学生活の多すぎる選択肢の中から選べるものは、持てるお金と時間に対して非常に少ない。友人の経験を聞くうちに、自分の歩んできた道に自信がなくなるときもあった。しかし、そのひとつひとつは確実に私が自分で選んできた道であり、そこから多くのことを学んできたはずだ。これからも、自分で選び取る道に自信と誇りを持ち、残りの大学生活を過ごしたい。

支部だより

市川市支部

市川市支部は、会員数約三百名である。平成二十二年十一月の支部総会を機に組織的な体制が整った。とはいえ、支部としての活動は年一回の総会・懇親会以外は支部長・事務局長に委ねることが多いのが実情である。

会員が顔を合わせる場となる支部総会・懇親会は例年秋に開催され、平成二十七年度で六回目となった。まだ出席率が高いとは言えないが、集まった会員は学校現場、市・県行政機関の現職者、様々な分野で退職後も活躍しているＯＢ、そして大先輩方と幅広い年代・立場の会員が円卓を囲み、在学時代の話で盛り上がり、会員相互の情報交換など有意義な交流の場になっている。

課題としては、個人情報という壁があり、正確な名簿作りが困難なことがあげられるが、総会・懇親会の回を重ねる中で「支部としての活動にも工夫を」という声も聞かれるようになってきている。この機運を具体的な活動につなげて、多くの会員が相互に交流を深められるようにしていきたい。

（文責　西　博孝）

木更津市支部

支部は動き出したばかりで、正確な人数も把握できていない。支部長と名乗っているが、選出されたものではない。平成十四年から、同窓会本部から求められる事務的な報告はその都度こなしてきた。

会の規約も資金もない。正式な役員もいないが、同窓会支部を立ち上げる準備を始めている。

平成二十二年発行の千葉大学教育学部同窓会名簿を頼りに、木更津在住者の氏名、住所を抽出した。その年以降の同窓生を拾い出すのが難儀である。扱いに注意を要する個人情報の入ったソフトを見せて頂き、「木更津市」の文字を探し当て該当者の氏名・住所・電話を書き出して仮名簿を平成二十七年秋、完成させた。現在も木更津市に在住しているかどうかを確認するのはこれからだ。何人かの協力者の力をお借りして、名簿を確定し、総会の準備に入る。規約案、役員案など作成する段階に到達した。二十八年夏頃を目安に立ち上げたいと思っている。

（文責　市東　宏）

同窓生の美術館

『糸あやつり人形師』

森　靖男
（Ｓ42・３卒・千葉市）

茂原の菖蒲園を訪れた折、園庭で、「江戸糸操り人形」と銘うって興行していた。いくつかの演目の中で「獅子舞」を観た時、これだ！と閃いた。

この画題をシリーズとして取り組んで十七年になる。

その中で操られる人形が人格を持ったらどうなるのだろう。いつも操られてばかりでは不満を持つかも知れない。時には人形師に反抗したくなることもあるだろうと想いを馳せてみた。人形師と獅子の心の交流・葛藤が表現できないか。テーマは毎年変化していた。

従順・疑問・反抗！

この作品は反抗の場面を想定した。

今この人形師は東京の大道芸の認定を受け、上野公園、不忍池周辺で月に何回か公演し、年に一・二回小規模な劇場公演の外、ブラジルを始め海外公演も行っている。

編★集★後★記

同窓会報がこの第百二十四号から、カラー印刷となりました。会報にとっては画期的な試みです。ページ数も二頁増として紙面を充実させました。現役の学生から生活の様子を、今年度、教育学部に入学した新入生の抱負、会員の方々の芸術作品の発表を加え、新たな紙面づくりです。

また、変遷してきている大学の様子を会員の方々に知っていただこうと、「大学の今昔」をお伝えするため、シリーズで掲載することになりました。

今回は、懐かしい音楽室（ピアノ練習室）。音楽科の方や小学校教員免許を取得した方々は、どなたも悲喜こもごもの思い出があるということです。今後も、懐かしい学び舎が現在どんな様子になっているかを、お知らせする予定です。感想や御希望をお寄せください。

芸術作品の発表の欄ですが、森靖男さんの油絵を掲載しました。皆様の中に、御自分の作品を発表したい方がありましたら、事務局か編集委員にお知らせください。また、お知り合いの同窓生に発表可能な方がいらっしゃいましたら、情報を御提供ください。

（文責　宮葉　清子）